

【晉紀十九】 起玄默攝提格，盡強圉協洽，凡六年。

■東晉、▲前燕、（続国訳漢文大成 經子史部 第 6 卷 104p）

顯宗成皇帝_下鹹康八年（壬寅，342年）

■春，正月，己未（元嘉曆二月1日）朔，日食之れ有り。

■乙丑（7日），大赦す。

■〔庾懌は王允之の毒殺失敗で自決〕豫州刺史の庾懌は酒を以て江州刺史の王允之^{おく}に餉る。允之は其の毒を覺り，犬に飲ませ，犬は斃れ，密かに之を奏す。帝は曰く、

「大舅（庾亮）は已に天下を亂し，小舅は復た爾^{しか}らんと欲す邪！」

二月（元嘉曆三月），懌は鳩を飲み而して卒す。

■三月（元嘉曆三月閏月），初めて武悼后（楊皇后、惠帝永康七年幽廢され死す）を以て武帝の廟に配食す。

■〔庾翼は王述に諫められ武昌に止まる〕庾翼は武昌に在り，數々妖怪有り，移りて樂郷に鎮せんと欲す。征虜長史の王述は庾冰に箋を與えて曰く、

「樂郷は武昌を去ること千有餘里，數萬之衆は，一旦は移徙し，城壁を興立すれば，（6-104p）公私は勞擾す。又た江州は當に流れを溯ること數千里，軍府に供給するには，力役は増倍す。且つ武昌は實に江東の鎮戍之中にして，但だ上流を扞禦する已に非らず。緩急の赴告に，駿奔（皆奔走す）するに難からず。若し樂郷に移り，遠く西陲に在れば，一朝江渚に虞^{うれ}い有れば，相い接して救わず。方岳の重將は，固より當に要害之地に居り，内外形勢と為り，窺窬（隙を覗う）之心をして向う所を知らざら使むべし。昔秦は亡胡之讖（秦の盧生が、秦を滅ぼすは胡なりと奏し、始皇帝は蒙恬に匈奴征伐を命じる）を忌み，卒に劉、項之資と為す。周国は檠弧之謠（周宣王の時の童謡に、檠弧箕服は実には周国を滅ぼさんと。宣王は夫婦のこの器をひさぐ者を殺す）を惡み，而して褒姒之亂（府の小妾は女を生みも王の子でなく、恐れて棄てる。この人は収めてに褒に奔る。褒人に獄ありて女を幽王に入れ、王はこの女・褒姒を辟して伯服を生む。太子宜臼を廢して伯服を立てんとし遂に申侯・西戎の乱と成す）を成す。是を以て達人君子は，道を直^{ただち}に而して行い，禳避之道は，皆な取らざる所なり。正に當に人事之勝理を擇び，社稷之長計を思ふべき耳。」

朝議は亦た以て然ると為し。翼は乃ち止む。

■〔帝は卒し琅邪王の岳即位〕夏，五月，乙卯（59日?），帝は不豫（病氣）なり。六月，庚寅（5日），疾篤し。或るひとは詐^{いつわ}りて尚書符を為^{つく}り，宮門に敕して宰相を内れるを得る無からしむ。衆は皆な色を失い。庾冰は曰く、

「此くは必らず詐り也。」

推問（糾明）し，果たして然り。帝の二子の丕、弈は，皆な襁褓^{むつき}（おしめ、赤子）に在り。庾冰は自ら以えらく兄弟は權を秉^とること日久しく，恐らくは易世之後に，親屬は愈々疏となり，它人の為に間せられん所，毎に帝に説くに、

「國に強敵（漢の前趙、後趙）有り，宜しく長君を立てるべし」

と以てす。母親の弟の琅邪王の岳を以て嗣と為すを請い，帝は之を許す。中書令の何充は曰く、

「父子相い傳えるは，先王の舊典なり，之を易える者は亂を致さざること鮮^{すくな}し。故に武王は聖弟（周公）に授けず，愛さざるに非ざる也。今琅邪は踐阼すれば，將に孺子を如何せん！」

冰は聽かず。下詔し、岳を以て嗣と為し、並せて弈を以て琅邪の哀王を繼がしむ。壬辰（7日）、冰、充及び武陵王の晞、會稽王の昱、尚書令の諸葛恢は並びて顧命を受ける。癸巳（8日）、帝は崩ず（年22）。帝は幼冲にして位を嗣ぎ、親ら庶政せず。長ずるに及び、頗る勤儉之徳有り。

■甲午（9日）、琅邪王は皇帝に即位し、大赦す。

■己亥（14日）、成帝の子の丕を封じて琅邪王と為し、弈を東海王と為す。

■【何充の皮肉】康帝は亮陰（服喪期間）言わず、政を庾冰、何充に委ねる。秋，七月，丙辰（1日）、成帝を興平陵に葬す。帝は徒行して喪を送り、閭闔門に至り、乃ち素輿に升起陵所に至る。既に葬して、帝は軒に臨み、庾冰、何充は侍して坐す。帝は曰く、

「朕が鴻業を嗣ぐは、二君之力也。」

充は曰く、

「陛下の龍飛するは、臣冰之力也（6-106p）。若し臣の議の如くならば、昇平之世を睹がず。」

帝は慚色有り。己未（4日）、充を以て驃騎將軍、都督徐州、揚州之晉陵諸軍事と為し、徐州刺史を領せしめ、京口に鎮し、諸庾を避ける也。

【前燕の高句麗攻撃】

▲冬，十月，燕王の皝は龍城に遷都し、其の境内を赦す。

▲【前燕の高句麗先攻策】建威將軍の翰は皝に言つて曰く、

「宇文の強盛は日に久しく、屢々國患と為る。今（宇文）逸豆歸（95卷咸和八年に乙得歸を追う）は篡竊（篡奪竊取）して國を得、群情は附かず。之に加えて性識は庸暗にして、將帥は才に非ず、國は防衛無く、軍は部伍無し。臣は久しく其の國に在り、其の地形を悉くす。遠く強羯（後趙、羯族）に附くと雖も、聲勢は接せず、救援に益無し。今若し之を撃てば、百舉して百克たん。然るに高句麗は國を去るに密邇（密に隣接）し、常に闕（見せ付ける）兪（門構えに兪の字）之志有り。彼は宇文の既に亡び、禍いは將に己に及ぶを知れば、必ず虚に乗りて深く入り、吾が不備を掩わん。若し少なく兵を留めれば則ち守るに以て足りず、多く兵を留めれば則ち以て行くに足りず。此れ心腹之患也、宜しく先ず之を除かん。其の勢力を觀るに、一舉に克つ可し。宇文は自ら守る之虜、必ず遠く來たりて利を爭う能わず。既に高句麗を取れば、還りて宇文を取るは、手を返（反）すの如き（易き）耳。二國既に平らげば、利は東海を盡くし、國は富み兵は強く、之を返顧して憂い無く、然る後に中原は圖る可し也。」

皝は曰く、

「善し！」

將に高句麗を撃たんとす。高句麗（丸都城、現・集安市）には二道有り、其の北道（撫順—永陵—通化—集安）は平闊、南道（撫順—木底城（新賓）—集安）は險狹、衆は北道によるを欲す。翰は曰く、

「虜は常情を以て之を料る、必ず大軍は北道に従うを謂い、當に北を重んじて而して南を輕んじる。王は宜しく銳兵を帥いて南道より之を撃つべし、其の不意に出れば、丸都（奉天省東邊道輯安県、現・吉林省通化市集安市）は取るに足らざる也。別に偏師を遣わして北道に出でしめ、縦え蹉跌有るとも、其の腹心は已に潰え、四支は能く為す無し也。」

皝は之に従う。

▲【慕容皝は南道から高句麗急襲】十一月，皝は自ら勁兵四萬を將して南道に出で、慕容翰、慕容霸（後の慕容垂）を以て前鋒と為し、別に長史の王寓等を遣わして兵萬五千を將して北道に出でしめ、以て高句麗

を伐つ。高句麗王の**釗**（故国原王）は果たして弟の**武**を遣わして精兵五萬を帥いて北道を拒がしめ、自ら羸兵を帥いて以て南道に備える。**慕容翰**等は先ず至り、**釗**と合戦し、**眭**は大衆を以て之に繼ぐ。左常侍の**鮮于亮**は曰く、

「臣は俘虜を以て王の國土之恩を蒙り（前卷咸康四年にあり）、以て報いざる可からず。今日は、臣が死するの日也！」

獨り數騎と與に先ず高句麗の陣を犯し、向う所陷を摧す。高句麗の陣は動き、大衆は因りて而して之に乗り、高句麗兵は大敗す。左長史の**韓壽**は高句麗の將の**阿佛和度加**を斬り、諸軍は勝ちに乗りて之を追ひ、遂に丸都に入る。**釗**は單騎にして走り、輕車將軍の**慕輿泥**は追いて其の母の**周氏**及び妻を獲りて而して還る。會々**王寓**等は北道に戦い、皆な敗没し、是に由りて**眭**は復た窮追せず。遣使して**釗**を招き、**釗**は出でず。

▲ **[高句麗王父の屍を暴き母を拉致]** **眭**は將に還らんとし、**韓壽**は曰く、

「高句麗之地は、戍守す可からず。今其の主は亡げ民は散り、山谷に潜伏す。大軍は既に去れば、(6-107p) 必ず復た鳩聚（集る）し、其の餘燼を收め、猶ほ患と為るに足る。請う其の父の屍を載せ、其の生母を囚え而して歸り、其の身を束ねて自ら歸すを俟てば、然る後に之を返し、恩信を以て撫でるは、策之上也。」**眭**は之に従う。**釗**の父の**乙弗利**（高句麗美川王）の墓を發く。其の屍を載せ、其の府庫の累世之寶を收め、男女五萬餘口を虜とし、其の宮室を燒き、丸都城を毀し而して還る。

■ **[皇后父の褚裒の外出]** **十二月**，壬子（30日），妃の**褚氏**を立てて**皇后**と成す。豫章太守の**褚裒**を征して待中、尚書と為す。**裒**は自ら**后**の父なるを以て、中に居りて事に任ずるを願わず、**苦**ろに外に出るを求める。乃ち建威將軍、江州刺史に除し、半洲に鎮ぜしむ。

[後趙] **[石虎の徴兵と私利貪婪に民は困窮]** **趙**王の**虎**は台觀四十餘所を鄴に作り、又た洛陽、長安の二宮を營み、作る者は四十餘萬人。又た鄴より閣道を起こして襄國に至らんと欲し、河南四州（洛・豫・徐・兗）に敕して南伐之備えを治めしめ、并、朔（石勒が朔方を平定して置く）、秦、雍をして西討（河西攻略）之資を嚴えしめ、青、冀、幽州をして東征之計（燕の攻略作戦）を為さしめ、皆な三五（三人の壮丁の二人、五人の壮丁の三人）の卒を發せしむ。諸州の軍の甲を造る者は五十餘萬人、船夫は十七萬人、水の没する所、虎狼の食する所と為る者は三分の一に居る。之に加えるに公侯、牧宰は競いて私利を營み、百姓は業を失いて愁困す。貝丘人の**李弘**は衆心之怨むに因りて、自ら、

「姓名は讖に應ず」

と言ひ、**黨**與を連結し、百寮を署置す。事は發かれ、之を誅し、連坐する者は數千家。

[後趙] **[石虎は狩獵と出歩き癖]** **虎**は畋獵に度無く、晨に出でて夜歸り、又た多く微行し、躬ら作役を察す。侍中の京兆の**韋謏**は諫めて曰く、

「陛下は天下之重きを忽せにし、輕々しく斤斧之間を行き、猝かに狂夫之變有れば、智勇有りと雖も、將に安んぞ施す所あらん！又た役を興すこと時無く、民の耘獲（耘は雜草を切る、農業）を廢し、吁嗟（ああ）路に盈ち、殆んど仁聖之為すに忍ぶる所に非ざる也。」

虎は**謏**に谷帛を賜わり、而るに繕を興くこと滋々繁く、游察すること自若なり。

[後趙] **[皇太子宣の戦力拡大に怨嗟]** 秦公の**韜**は**虎**に寵有り、太子の**宣**は之を惡む。右僕射の**張離**は五兵（中兵・外兵・騎兵・別兵・都兵）尚書を領し、**宣**に媚を求めんと欲し、之に説いて曰く、
「今諸侯の吏兵は限に過ぎ、宜しく漸く裁省し、以て本根（根本）を壯とすべし。」

宣は離をして為に奏せ使む：

「秦(韜)、燕(斌)、義陽(鑿)、樂平(苞)の四公には、吏一百九十七人、帳下の兵二百人を置くを聽^{ゆる}すべし。是より以下は、三分の一を置き、餘兵の五萬は、悉く東宮に配(隸屬)すべし。」

是に於いて諸公は鹹な怨み、嫌釁は益々深し矣。

後趙 **〔南征の総動員令に民苦しむ〕** 青州は上言す、

「済南の平陵城北の石虎、一夕城の東南に移る、狼狐千餘有り跡おいて之に隨う、跡は皆な蹊^{みち}を成す。」虎は喜んで曰く、

「石虎なる者は、朕也。西北より徙り而して東南する者は、天意は朕をして江南を平蕩せ使めんと欲する也。其れ諸州の兵に敕して明年悉く集め、朕は當に親ら六師を董し、以て天命を奉じん。」

群臣は皆な賀す、《皇徳の頌》を上る者は一百七人。制して、

「征士五人ごとに車一乗、牛二頭、米十五斛、絹十匹を出さしめ、(6-108p) 調の辦ぜざる者は斬る。」

民は子を鬻^{ひき}ぎて以て軍須(行軍の必需品)に供するに至り、猶ほ給する能わず、自ら道樹に經(首つる)する者相い望む(数が多い)。

康皇帝 **下建元元年(癸卯、343年)** (康皇帝の諱は岳、字は世同、成帝の母弟)

▲ **〔高句麗朝貢し父の屍返還、母は留める〕** 春、二月、高句麗王の釗は其の弟を遣わして臣と稱して燕に入朝し、珍異を貢ぐに千を以て數う。燕王の皝は乃ち其の父の屍を還し、猶ほ其の母を留めて質と為す。

▲ **〔宇文氏は燕を攻め大破す〕** 宇文逸豆歸は其の相の莫淺渾を遣わして兵を將いて燕を撃たしむ。諸將は争いて之を撃たんと欲し、燕王の皝は許さず。莫淺渾は以て皝が之を畏れると為し、酣飲して縦に獵し、復た備えを設けず。皝は慕容輪をして出でて之を撃たしめ、莫淺渾は大敗し、僅に身を以て免れ、盡く其の衆を俘とす。

【庾翼の北伐計画、桓温登場】

■ **〔庾翼と殷浩〕** 庾翼の人と為りは慷慨して、功名を喜び、浮華を尚^{たつと}ばず。琅邪内史の桓温は、彝^い(蘇峻の難に死す)之子也、南康公主(明帝の娘)に尚し、豪爽にして風概(風力気概)有り。翼は之と友善し、相い期して以て海内を寧濟す。翼は嘗て温を成帝に薦して曰く、

「桓温は英雄之才有り、願はくは陛下は常人を以て之を遇する勿かれ、常婿として之を畜^{やしな}うべし。宜しく委ねるに方、邵(方叔・邵虎、周の宣王に用いられ中興の業を輔ける功臣)之任を以てすべし、必ず艱難を弘濟する之勳有り」。

時に杜乂、殷浩は並びに才名は世に冠たり、冀は獨り之を重んぜざる也、曰く、

「此の輩^{やから}は宜しく之を高閣に束ね、天下の太平なるを俟ち、然る後に徐ろに其の任を議す耳。」

浩は累^{しき}りに征辟を辭し、墓所に屏居し、幾んど將に十年にならんとす、時の人は之を管、葛(管仲・諸葛亮)に擬す。江夏の相の謝尚、長山の令の王濛は常に其の出處を伺う、以て江左の興亡を卜す。嘗て相い與に之を省し、浩の確然之志有るを知り、既に返り、相い謂いて曰く、

「深源(殷浩の字) 起たざれば、當に蒼生(人民)を如何すべき！」

尚は、鯤之子也。翼は浩を司馬と為すを請う。詔して侍中、安西軍司(軍の司馬)に除す、浩は應じず。翼は浩に書を遣りて曰く、

「王夷甫は名を立てること真に非ず、道を談ずと雲うと雖も、實は華競を長ぜり。明德の君子は、會に遇い際に處り（風雲の機会に遇い功名の際に處る）、寧んぞ然る可けん乎！」

浩は猶ほ起たず。

■ 〔長沙相の殷羨の食殘と庾翼の論評〕 殷羨は長沙の相と為り、郡に在りて食殘し、庾冰は翼に書を與えて之を屬す。翼は報じて曰く、

「殷君の驕豪なるは、亦た佳兒（殷浩）有るに由るに似たり、弟（翼の弟は冰）故に小さく物情をして之を容れ令む。大較（大略）江東之政は、豪強を^{うく}嫗煦（親鳥が暖め育てる）するを以て、常に民の蠹（木食い虫）と為る。時に法を行う有り、輒ち之を寒劣（微賤なる者）に施す。往年の如き石頭の倉米一百萬斛を偷むは、皆な是れ豪將の輩なり、而るに直だ倉の督監（監督官）を殺し以て責を塞ぐ。（6-109p）山遐（字は彦林）は餘姚（會稽の県、浙江省會稽道餘姚県、現・寧波市余姚市）の長と為り、官の為に豪強の所藏する二千戸を出す、而るに衆は共に之を驅り、遐をして席を安んずるを得ざら使む。皆な前宰（王導）之悞謬（胡三省いわく、庾翼は小才を察挙するのみ。江東草創の時に當りて王導の弘致遠識に非ざれば救う能わず。これを悞謬、すなわち過ちというは、談何ぞ容易なると）と雖も、江東の事去るは、實に此に之れ由る。兄弟不幸にして、横しまに此の中に陷ち、自ら足を風塵之外に抜く能わず、當に共に目を明らかに而して之を治むべし。荊州の統べる所の二十餘郡は、唯だ長沙が最も惡し。惡く而も黜^{しりぞ}けざれば、督監を殺す者と復た何の異なる邪！」

遐は、簡（山簡は永嘉中に襄陽に鎮す）之子也。

■ 〔庾翼は後趙前涼と約し蜀奪取計画〕 翼は胡を滅し蜀を取るを以て己が任と為し、遣使して東に燕王の^皝に約し、西に張駿に約し、期を刻して大舉せんとす。朝議は多く以て難しと為し、唯だ庾冰のみ意は之と同じくす、而して桓溫、譙王の無忌は皆な之に賛成す。無忌は、丞（譙王丞は王敦の難に死す）之子也。

■ 〔庾翼の北伐の企み〕 秋、七月、趙の汝南太守の戴開は數千人を帥いて翼に詣りて降る。丁巳（8日）、下詔して中原を經略するを議す。翼は所部之衆を悉くして北伐せんと欲し、桓宣を表して都督司、雍、梁三州、荊州之四郡（南陽・新野・襄陽・南郷）諸軍事、梁州刺史と為し、前みて丹水（河南省汝陽道淅川県の西、丹水の陽にあり、現・南陽市淅川県）に趣かしむ。桓溫を前鋒小督と為し、節を假し、衆を帥いて臨淮に入らしむ。並びに統べる所の六州（江荆司雍梁益）の奴及び車牛驢馬を發し、百姓は嗟怒す。

▲ 〔代〕 〔什翼犍は燕に婚を求め、逆に攻められる〕 代王の什翼犍（北魏道武帝拓跋珪の祖父）は復た燕に婚を求め、燕王の^皝は馬千匹を納めて禮と為さ使む。什翼犍は與えず、又た倨慢（傲慢）にして子婿の禮無し。八月、^皝は世子の^劬を遣わして前軍師の^評等を帥いて代を撃たしむ。什翼犍は衆を帥いて避け去り、燕人は見る所無く而して還る。

〔成漢〕 漢主の壽は卒し（年44）、諡して昭文と曰い、廟號を中宗とす。太子の^勢（字は子仁、長子）は即位し、大赦す。

〔後趙〕 趙の太子の宣は鮮卑の^斛谷提を撃ち、大いに之を破り、斬首は三萬級なり。

〔後趙〕 宇文逸豆歸は段遼の弟の蘭（段遼が敗れて宇文に亡命）を執り、趙に送り、並びて駿馬萬匹を獻ず。趙王の虎は蘭に命じて従う所の鮮卑五千人を帥いて令支に屯ぜしむ。

■ 〔庾翼の北伐体制構築〕 庾翼は移りて襄陽に鎮せんと欲し、朝廷の許さざるを恐れ、乃ち奏して雲わく、

「移りて安陸（江夏郡の県、湖北省江漢道安陸県、現・孝感市安陸市）に鎮せん。」

帝及び朝士は皆な遣使して翼を^{きと}譬し止め、翼は遂に詔に違いて北行す。夏口に至り、復た上表して襄陽に鎮するを請う。翼は時に衆四萬有り、詔して翼に都督征討諸軍事を加える。是より先車騎將軍、揚州刺史

の**庾冰**は屢々外に出るを求め、(冬十月) 辛巳（3日）、**冰**を以て都督荆、江、寧、益、梁、交、廣七州、豫州之四郡（宜城・歷陽・盧江・安豐）諸軍事と為し、江州刺史を領せしめ、節を假し、武昌に鎮せしめ、以て**翼**の繼援と為す。徐州刺史の**何充**を征して督揚、豫、徐州之琅邪諸軍事と為し、揚州刺史を領せしめ、尚書事を録し、政を輔けしむ。(6-110p)琅邪内史の**桓溫**を以て都督青、徐、兗三州諸軍事、徐州刺史と為し、江州刺史の**褚裒**を征して衛將軍と為し、中書令を領せしむ。

■**冬、十一月**、己巳（22日）、大赦す。

康皇帝下建元二年（甲辰，344年）

後趙 **〔白雁の集るは不吉〕** **春、正月**、趙王の**虎**は群臣に太武殿に於いて享し、白雁百餘有りて馬道（馬を往来させる道）之南に集まる、**虎**は命じて之を射しめ、皆な獲ず。時に諸州の兵の集まる者は百餘萬、太史令の**趙攬**は密かに**虎**に言つて曰く、

「白雁の庭に集まるは、宮室は將に之を空しからんとするの象なり、南行するは宜しからず。」
虎は之を信じ、乃ち宣武觀（洛都の例により鄴に築く）に臨み、大いに闕し而して罷む。

成漢 漢主の**勢**は改元して太和とし、母の**閭氏**を尊んで皇太后と為し、妻の**李氏**を立てて皇后と為す。

【宇文氏の滅亡】

▲ **〔前燕は宇文を伐つ〕** 燕王の**皝**は左司馬の**高詡**と謀りて宇文**逸豆歸**を伐つ。**詡**は曰く、
「宇文は強盛にして、今取らざれば、必ず國患と為らん、之を伐てば必ず克つべし。然るに將に於いて利あらず。」

出でて而して人に告げて曰く、

「吾は往きて必ず返さず、然るに忠臣は避けざる也。」

是に於いて**皝**は自ら將いて**逸豆歸**を伐つ。**慕容翰**を以て前鋒將軍と為し、**劉佩**を之の副とす。分けて**慕容軍**、**慕容恪**、**慕容霸**及び折衝將軍の**慕容皝**に命じて兵を將いて、三道より並び進ましむ。**高詡**は將に發せんとし、其の妻を見ず、人をして語るに家事を以てせしめ而して行く。

▲ **〔慕容皝は宇文氏を滅ぼす〕** **逸豆歸**は南羅の大（將）の**涉夜干**を遣わして精兵を將いて逆え戦わしめ、**皝**は人を遣わして馳せて**慕容翰**に謂つて曰わしむ、

「**涉夜干**は勇にして三軍に冠たり、宜しく小し之を避けるべし。」

翰は曰く、

「**逸豆歸**は其の國內の精兵を掃して以て**涉夜干**に屬す、**涉夜干**は素より勇名有り、一國の頼る所也。今我は之に克てば、其の國は攻めずして自ら潰ゆ矣。且つ吾は**涉夜干**之人と為りを孰知（熟知）す、虚名有りと雖も、實は與し易し耳、之を避けるは宜しからず、以て吾が兵の氣を挫かん。」

遂に進みて戦ふ。**翰**は自ら出でて陣を衝き、**涉夜干**は出でて之に應じる。**慕容霸**は傍より邀撃し、遂に**涉夜干**を斬る。宇文の士卒は**涉夜干**の死するを見て、戦わず而して潰ゆ。燕兵は勝ちに乗りて之を逐い、遂に其の都城（遼西の紫蒙川、内蒙古土默特部、熱河朝陽県、現・朝陽市）に克つ。**逸豆歸**は走りて漠北に死し、宇文氏は是に由りて散じ亡ぶ。**皝**は悉く其の畜産、資貨を収め、其の部衆五千餘落を昌黎に徙し、地を闢くこと千餘里。更めて**涉夜干**の居する所の城に命じて威德城と曰い、弟の**彪**をして之に戍らしめ而して還る。**高詡**、**劉佩**は皆な流矢が中たりて卒す。

▲〔高詡は天文を善くす〕詡は天文を善くし、**眭**は嘗て謂って曰く、

「卿は佳書有り而して與え見れざれば、何を以て忠盡（忠誠）と為さん！」

詡は曰く、

「臣は聞くに、人君は要を執り、人臣は職を執る。要を執る者は逸し、職を執る者は勞す。是を以て后稷は播種し、堯は焉に預からず。天文を占候するは、^{しんや}晨夜甚だ苦しみ、至尊之宜しく親らする所に非ず、殿下は將に^{いずく}焉くにか之を用いんとす！」

眭は默然とす。

▲〔後趙の援軍を慕容彪は破る〕初め、(6-111p) **逸豆歸**は趙に事えること甚だ謹しみ、貢獻は路に^{つづ}屬く。燕人の**逸豆歸**を伐つに及び、趙王の**虎**は右將軍の**白勝**、并州刺史の**王霸**をして甘松（濡源の東、突門嶺の西）より出でて之を救わ使む。至る比おい、宇文氏は已に亡び、因りて威徳城を攻め、克たず而して還る。**慕容彪**は追撃して、之を破る。

▲〔慕容翰は死を賜る〕**慕容翰**之宇文氏と戦う也、流矢の中たる所と為り、病に臥し時を積みて出でず。

後に漸く^い差え、其の家に於いて試みに馬を^は騁せる。或は、

「**翰**は病と稱し而して私かに騎乗を習う、疑うに變を為さんと欲す」

と告ぐ。燕王の**眭**は**翰**の勇略に^よ藉ると雖も、然るに中心は終に之を忌み、乃ち**翰**に死を賜う。**翰**は曰く、

「吾は罪を負いて出奔（95 卷成帝咸和八年）し、既に而して復た還り（前卷咸康八年）、今日死は已に^{おそ}晩し矣。然るに羯賊は中原に跨據し、吾は自ら量らず、國家の為に區夏を蕩壹せんと欲す。此の志は遂げず、没して遺恨有り、命なる矣夫！」

藥を飲んで而して卒す。

▲代王の**什翼犍**は其の大人の**長孫秩**を遣わして婦を燕より迎える。

後趙**夏**，四月，涼州の將の**張瓘**は趙將の**王擢**を三交城（朔方の西、山西省冀寧道陽曲県の北、現・太原市陽曲県）に敗る。

後趙〔王波は太子宣に生贄にされる〕初め、趙の領軍の**王朗**は趙王の**虎**に言って曰く、

「盛冬にして雪寒し、而るに皇太子は人をして宮材を伐り、漳水に引か使め、役する者は數萬なり、吁嗟（怨嗟の声）は道に滿つ、陛下は宜しく出遊に因りて之を罷むべし。」

虎は之に従う。太子の**宣**は怒る。會々熒惑は房を守る、**宣**は太史令の**趙攬**をして**虎**に言って曰わ使む、

「房は天王と為す、今熒惑は之を守り、其の^{わざわい}殃は細ならず。宜しく貴臣王姓の者を以て之に當てるべし。」（生贄にする）

虎は曰く、

「誰か可なる者や？」

攬は曰く、

「王領軍よりも貴きは無し。」

虎の意は**朗**を惜しみ、**攬**をして更に其の次を言わ使む。**攬**は以て對える成し、因りて曰く、

「其の次は唯だ中書監の**王波**耳。」

虎は乃ち下詔して、**波**が前に枯矢を議す（前卷成帝咸和六年）事を追罪し、之を腰斬し、其の四子に及び、屍を漳水に投げる。既に而して其の無罪を愍み、司空を追贈し、其の孫を封じて侯と為す。

後趙▲趙の平北將軍の**尹農**は燕の凡城を攻め、克たず而して還る。

成漢 **〔成漢の祀り〕** 漢の太史令の**韓皓**は上言す、

「熒惑は心を守り、乃ち宗廟が修まらざる之譴めなり。」

漢主の**勢**は群臣に命じて之を議さしむ。相國の**董皎**、侍中の**王嘏**は以て為す、

「**景**（李特は景武皇帝と諡、廟は始祖とす）、**武**（雄は武皇帝と諡、太宗）は創業し、**獻**（驤は獻皇帝）、**文**（壽は文皇帝）は基
いを承け、至親遠からず、宜しく疏絶する無し。」

乃ち更に命じて成（成漢）の始祖、**太宗**を祀り、皆な之を漢と謂う。

■ **〔桓宣は趙に敗北〕** 征西將軍の**庾翼**は梁州刺史の**桓宣**をして趙將の**李羆**を丹水に撃たせめ、**羆**の敗る所
と為り、**翼**は宣を貶として建威將軍と為す。宣は慚憤して疾を成し、**秋**、**八月**、庚辰（7日）、卒す。**翼**
は長子の方之を以て義城（義成の誤り、襄陽に治す）太守と為し、(6-112p)代わりて宣の衆を領せしむ。又た司
馬の**應誕**を以て襄陽太守と為し、參軍司馬の**勳**を梁州刺史と為し、西城（魏興郡の県、陝西省漢中道安康県、現・
安康市漢滨区）に戍せしむ。

■ **〔褚裒の外出〕** 中書令の**褚裒**は樞要を固辭す。**閏月**、丁巳（元嘉曆九月14日）、**裒**を以て左將軍、都督兗
州、徐州之琅邪諸軍事、兗州刺史と為し、金城（江蘇省金陵道句容県、現・鎮江市句容市）に鎮ぜしむ。

【幼帝即位、何充專政】

■ **〔康皇帝の崩御、何充の権力拡大〕** 帝の疾は篤く、**庾冰**、**庾翼**は會稽王の**昱**を立てて嗣と為さん欲す。中
書監の**何充**は建議して皇子の**聃**を立てんとし、**帝**は之に従う。**九月**、丙申（元嘉曆十月24日）、**聃**を立て
て皇太子と為す。戊戌（26日）、**帝**は式乾殿（洛陽に準じる名前）に崩ず。（年23）己亥（27日）、**何充**は遺
旨を以て太子を奉じて即位せしめ、大赦す。是に由りて**冰**、**翼**は深く**充**を恨む。皇后の**褚氏**を尊して皇太
后と為す。時に**穆帝**は方に二歳、**太后**は臨朝して稱制す。**何充**は中書監を加え、尚書事を録さしむ。**充**は
自ら陳ず、

「既に尚書を録す、復た中書を監するは宜しからず」

之を許し、復た侍中を加える。

■ **〔褚裒は太后之父として処遇〕** **充**は以えらく左將軍の**褚裒**は、太后之父なり、宜しく朝政を綜ずべし
と、上疏して**裒**を薦して尚書を參録せしむ。乃ち**裒**を以て侍中、衛將軍、錄尚書事、持節、都督と為し、
刺史は故の如し。**裒**は近戚を以て、讒嫌（機嫌）を獲るを懼れ、上疏して固く藩に居るを請う。改めて都督
徐、兗、青三州、揚州之二郡（晉陽・義興）諸軍事、衛將軍、徐、兗二州刺史を授け、京口に鎮ぜしむ。尚
書して奏す、

「**裒**は**太后**に見えるに、公庭に在りて則ち臣禮の如くし、私覲（私禮を以て見える）には則ち嚴父のごとくす
べし。」

之に従う。

■ **冬**、**十月**、乙丑（元嘉曆十一月22日）、**康帝**を崇平陵に葬す。

■ **〔庾冰は卒し庾翼は後挙を図る〕** 江州刺史の**庾冰**は疾有り。**太后**は**冰**を征して政を輔けしめんとし、**冰**
は辭し、**十一月**、庚辰（元嘉曆十二月9日）、卒す。**庾翼**は家國情事を以て、子の方之を留めて建武將軍と為
し、襄陽に戍せしむ。方之は年少く、參軍の**毛穆之**を以て建武司馬と為し以て之を輔けしむ。**穆之**は、**寶**
之子也。**翼**は還りて夏口に鎮し、詔して**翼**を復た江州を督せしめ、又た豫州刺史を領せしむ。**翼**は豫州を
辭し、復た移りて樂郷に鎮せんと欲す、詔して許さず。**翼**は仍って軍器を繕修し、大いに佃し穀を積み、
以て後舉を圖る。

後趙 **〔河橋建設の失敗〕** 趙王の**虎**は河橋を靈昌津に作り、採石して中濟（流れをせき止める石を流して土台とする）と為し、石下れば、輒ち流れに随い、功を用いるに五百餘萬而して橋は成らず、**虎**は怒り、匠を斬りて而して罷む。（2021-1201）

孝宗穆皇帝上之上永和元年（乙巳，345年）（諱は聃、字は澎之、康帝の子）（6-113p）

■**春，正月**，甲戌（朔は辛未）朔，**皇太后**は白紗の帷を太極殿に設け，**帝**を抱きて軒に臨む。

後趙 **〔石鑒は關中にて過酷な政治で交代〕** 趙の義陽公の**鑒**は關中に鎮し、役は煩わしく賦は重く、文武の長髪有る者は、輒ち抜きて冠纓（冠の紐）と為し、餘は以て宮人に給う。長史は發（髪）を取り趙王の**虎**に白す、**虎**は**鑒**を征して鄴に還らしむ。樂平公の**苞**を以て代わりて長安に鎮せしむ。雍、洛（石虎は司州の河南・弘農・滎陽・兗州の陳留・東燕を分けて洛州を置く）、秦、并州の十六萬人を發して長安の未央宮を治せしむ。

後趙 **〔石虎の野蛮な政策で民は苦しむ〕** **虎**は獵を好み、晩歲、體は重く馬に跨る能わず、乃ち獵車千乘を造り、期を刻して校獵す。靈昌津より南に滎陽に至り、東は陽都に極まるまで獵場と為し、御史をして監察せしめる。其の中の禽獸は、犯す者有れば罪は大辟に至る。民に美女、佳き牛馬有り、御史は之を求めて得ざれば、皆な誣ふるに獸を犯すを以てし、論死する者は百餘人。諸州二十六萬人を發して洛陽宮を修す。百姓牛二萬頭を發して、朔州の牧官（趙が朔方に置く）に配す。女官二十四等、東宮十二等、公侯七十餘國には皆な九等を増して置き、大いに民の女三萬餘人を發し、料りて三等と為し以て之を配す。**太子**、諸公の私に采發せしむる者は又た將に萬人なり。郡縣は務めて美色を求め、多くは人の妻を強奪し、其の夫を殺し及び夫の自殺する者は三千餘人なり。鄴に至り、**虎**は軒に臨みて簡第（選んで等級を査定）す、使者を以て能と為し、侯に封じる者十二人。荆楚（趙の南陽・汝南は故の荆楚の地）、揚（州、壽陽など）、徐（彭城・下邳・琅邪・東莞は徐州）之民は流叛して略ぼ盡く。守令は綏懷する能わざるに坐して、獄に下して誅せらる者は五十餘人なり。金紫（金章紫綬を加える）光祿大夫の**遼明**は侍するに因りて切諫し、**虎**は大いに怒り、龍騰（石虎は驍勇の者を募集して龍騰中郎とす）をして之を拉殺せしむ。

▲ **〔燕の重税への封裕諫言、学問の奨励〕** 燕王の**軌**は牛を以て貧民に假し、苑中に佃せしめ、其の什之八を税とし、自ら牛有る者は其の七を税とす。記室參軍の**封裕**は上書して諫めて、以て為す、

「古の者は什に一而して税す、天下之中正也。降りて魏、晉に及び、仁政は衰え薄くし、官田官牛を假る者は其の什に六を税するに過ぎず、自ら牛有る者は之を中分す、猶ほ其の七八を取らざる也。永嘉より以來、海内は蕩析し、**武宣王**（慕容廆）は之を綏んずるに德を以てし、華夷之民（慕容廆に民が歸すは88卷建康元年にあり）は、萬里より輻湊し、襁負而して之に歸する之者は、赤子之父母に歸す若し。是を以て戸口は舊に十倍し、田無き者は什に三四有り。**殿下**の統を繼ぐに及び、南は強き趙を摧き（前卷成帝咸康四年）、東は高句麗を兼ね（前卷成帝咸康八年）、北は宇文を取り（康帝建元二年）、地を拓くこと三千里、民を増すに十萬戸、是れ宜しく悉く苑囿を罷め以て新民に賦し（分け与える）、牛無き者は官は之に牛を賜い、當に更に重税を収めざるべき也。且つ**殿下**之民を以て**殿下**之牛を用い、牛は**殿下**之有に非ずして、將に何んぞ在らん哉！（6-114p）此くの如く、則ち戎旗（軍旗）が南を指す之日、民は誰か簞食壺漿（孟子、食物飲物を準備し軍隊を歓迎）して以て王師を迎えざらんや、**石虎**は誰と與にか處らん矣！川瀆（川運河）溝渠（排水溝）廢塞する有る者は、皆な應に通利すべし、早に由りては灌漑し、潦（長雨）すれば則ち疏洩せん。一夫耕さざれば、或は之が饑えを受ける。況んや游食するもの數萬あれば、何を以て家給し人足るを得ん乎？今官司は猥多く（衆多い）して、虚しく廩祿を費し、苟しくも才は用に周（調）わざり、皆な宜しく澄汰（水を澄まして汚泥を清める、転じ

て無能な人物を罷免する)すべし。工商の末利は、宜しく常員を立てるべし。學生は三年成る無しは、徒らに英俊之路を塞ぎ、皆な當に之を農に歸すべし。殿下は聖德寛明にして、博く芻蕘^{すうじょう}(草を刈り薪を採る)を采(統は察)す。參軍の王憲、大夫の劉明は並びて事を言うを以て旨に忤^{さから}い、主者(王憲・劉明の獄を断じた者)は處するに大辟を以てし、殿下は其の死を恕むと雖も、猶ほ官を免じて禁錮せられる。夫れ諫諍を求め而して直言を罪とするは、是れ猶ほ越に適かんと而して北に行くがごとく、必ず其の志す所を獲ず矣!右長史の宋該等は阿媚(媚びへつらう)して苟くも容れられ、輕々しく諫士を劾し、己は骨鯁(魚の骨が喉につかえる、剛直な人)無く、人を嫉む之れ有り、耳目を掩蔽す、不忠之甚だしき者也。」

鮑は乃ち下令して、稱す、

「封記室之諫めを覽じ、孤は實に焉を懼る。國は民を以て本と為し、民は谷(穀)を以て命と為す、悉く苑囿を罷め以て民之田無き者に給う可し。實に貧しき者は、官は之に牛を與えるべし。力の餘り有るに官牛を得んと願う者は、並びに魏、晉の舊法に依れ、溝瀆果(統は各々)たして益有る者は、時を以て修治せ令しめよ。今戎事は方に興こり、勳伐(勲功)は既に多く、歲(統は官)は未だ喊ず可からず、中原の平一するを俟ち、徐ろに更に之を議せん。工商、學生は皆な當に裁擇^{さいたく}すべし。夫れ人臣は人主に關言(上言)するは、至難也、狂妄有ると雖も、當に其の善なる者を擇び而して之に従うべし。王憲、劉明は、罪は應に廢黜すべしと雖も、亦た孤之大量無きに由る也、悉く本官に復し、仍つて諫司に居る可し。封生は蹇蹇(易の蹇卦に「王臣蹇蹇として躬の故に匪ず」より)として、深く王臣之體を得たり、其れ錢五萬を賜う。内外に宣示し、孤の過ちを陳ぜんと欲する者有れば、貴賤に拘らず、諱む所有る勿かれ!」

鮑は雅より文學を好み、常に親ら庠序(学校)に臨み講授、考校(研究)し學徒は千餘人に至る、頗る妄濫(みだり)になる者有り、故に封裕は之に及ぶ。

■ 〔會稽王昱の登用、郗超の才能〕 詔して衛將軍の褚裒を征して、以て揚州刺史、錄尚書事と為さんと欲す。吏部尚書の劉遐、長史の王胡之は裒を説いて曰く、

「會稽王の令德は雅望あり、國之周公也、足下は宜しく大政を以て之に授けるべし。」

裒は乃ち固辭し、藩に歸る。(夏四月)壬戌(23日)、會稽王の昱を以て撫軍大將軍、錄尚書六條事(錄尚書事の部下)と為す。昱は清虛にして寡慾、尤も玄言(奥深い言説)を善くし、常に劉惔、王濛及び潁川の韓伯を以て談客と為し、又た郗超を辟して撫軍掾と為し、謝萬を從事中郎と為す。超は、鑒(南遷の頃の名臣)之孫也、(6-115p) 少きとき卓犖^{たくらく}(卓抜)不羈(物事に束縛されず行動が自由気まま)なり。父の愔は、簡默(簡静沉默)冲退に而して財に嗇に、錢を積んで數千萬に至り、嘗て庫を開き超が取る所に任す。超は散じて親故に施し、一日にして都て盡くす。萬は、安之弟也、清曠にして秀邁、亦た時に名有り。

▲ 〔燕は和龍と名付ける〕 燕に黒龍、白龍有りて龍山(龍城の東)に見わる、首を交えて遊戲し、角を解いて而して去る。燕王の鮑は親ら祀るに太牢を以てし、其の境内に赦し、命(統は名)じて居る所の新宮を和龍と曰わしむ。

■ 〔庾翼は卒す〕 都亭の肅侯の庾翼は疽を背に發す。子の爰之を表して行輔國將軍、荊州刺史と為し、委ねて以て後任とす。司馬の義陽の朱熈を南蠻校尉と為し、千人を以て巴陵を守らしむ。秋、七月、庚午(27日)、卒す。

■ 翼の部將の干瓚等は亂を作し、冠軍將軍の曹據を殺す。朱熈は安西長史の江彪、建武司馬の毛穆之、將軍の袁真等と共に之を誅す。彪は、統之子也。

■**八月**，豫州刺史の**路永**（蘇峻の降将）は叛して趙に奔り，趙王の**虎**は**永**をして壽春に屯ぜ使む。

【桓温は荊州刺史に赴任、地盤となる】

■**〔何充は庾翼の後任に桓温推薦〕**庾翼は既に卒し，朝議は皆な以えらく、

「諸々の**庾**は世々は西籐に在り，人情の安んじる所，宜しく**翼**が請う所に依りて，**庾爰之**を以て其の任を代えるべし。**何充**は曰く、

「荊楚は，國之西門なり，戸口は百萬。北に強胡を帶び，西に勁蜀に鄰し，地勢は險阻にして，周旋は萬里なり。人を得れば則ち中原は定まる可く，人を失えば則ち社稷は憂す可し，**陸抗**の謂う所の『存すれば則ち呉は存し，亡すれば則ち呉は亡ぶ』者也，豈に白面の少年を以て之に當たる可き哉！**桓温**は英略人に過ぎ，文武に器干有り。西夏之任は，**温**を出る者無し。」

議者は又た曰く、

「**庾爰之**は肯えて**温**を避ける乎？如し兵を阻ま令めば，恥懼は淺からず。」（**庾爰之**を制する能わざれば，將に国の恥とならん、又懼れるべきものあらん）

充は曰く、

「**温**は以て之を制するに足らん，諸君は憂う勿かれ。」

■**〔劉惔は桓温の不臣の志を見抜く〕**丹楊尹の**劉惔**は毎に**温**の才を奇とする，然るに其の不臣之志有るを知り，會稽王の**昱**に謂って曰く、

「**温**をして形勝之地に居ら使む可からず，其の位號は常に宜しく之を抑さえるべし。」

昱に勧めて自ら上流に鎮し，己を以て軍司と為さしむ，**昱**は聽さず。又た自ら行かんと請う，亦た聽さず。

■**〔桓温を荊州刺史とす〕**庚辰（41日?），徐州刺史の**桓温**を以て安西將軍、持節、都督荊、司、雍、益、梁、寧六州諸軍事、領護南蠻校尉、荊州刺史と為し，**爰之**は果たして敢えて爭わず，又た**劉惔**を以て沔中の諸軍事を監じ，義成太守を領せしめ，**庾方之**に代わらしむ。**方之**、**爰之**を豫章に徙す。

■**桓温**は嘗て雪に乗じ獵せんと欲し，先ず**劉惔**を過ぎ，**惔**は其の装束の甚だ嚴なるを見て，之に謂って曰く、

「老賊は此を持して何を為さんと欲するか？」

温は笑いて曰く、

「我は此を為さざれば，卿は安んぞ坐談するを得る乎！」

成漢 **〔成漢皇帝勢の弱体化〕**漢主の**勢**之弟の大將軍の**廣**は，**勢**の子無きを以て，太弟と為るを求め，**勢**は許さず。**馬當**、**解思明**は諫めて曰く、

「陛下は兄弟多からず，若し復た廢する所有れば，將に益々孤り危うし。」

固く之を許すを請う。**勢**は其の**廣**と與に謀有るを疑い，**當**、**思明**を収めて之を斬り，其の三族を夷ぐ。（6-116p）太保の**李弈**を遣わして**廣**を涪城に襲わしめ，**廣**を貶めて臨邛侯と為し，**廣**は自殺す。**思明**は收め被れ，歎じて曰く、

「國之亡びざるは，我數人を以て在る也，今其の殆^{あや}うい矣！」

言い笑いて自若し而して死す。**思明**は智略有り，敢えて諫諍す。**馬當**は素より人心を得る。其の死するに及び，士兵は之を哀しまざる無し。

▲**〔燕は高句麗遼東半島を攻略〕****冬，十月**，燕王の**皝**は**慕容恪**をして高句麗を攻め使め，南蘇（南陝の南、奉天省東邊道金県、現・遼寧省大連市金州区）を抜き，戍を置き而して還る。

前涼 **〔張駿は涼王を称し王者に擬す〕** **十二月**、張駿は焉耆を伐ち、之を降す。是の歳、駿は武威等十一郡（武威・武興・西平・張掖・酒泉・建康・西郡・湟河・晉興・須武・安故）を分けて涼州と為し、世子の**重華**を以て刺史と為す。興晉等八郡（興晉・金城・武始・南安・永晉・大夏・武成・漢中）を分けて河州と為し、寧戎校尉の**張瓘**を以て刺史と為す。敦煌等三郡（敦煌・晉昌など）及び西域都護等三營を分けて沙州と為し、西胡校尉の**楊宣**を以て刺史と為す。駿は自ら大都督、大將軍、假涼王と稱し、三州を督攝し、始めて祭酒、郎中、大夫、舍人、謁者等の官を置き、官員は皆な天朝になら仿ひ而して其の名を微變し、車服旌族は王者に擬す。

後趙 **〔石虎は姚弋仲を重用す〕** 趙王の虎は冠軍將軍の姚弋仲を以て持節、十郡六夷大都督、冠軍大將軍と為す。弋仲は清儉にして鯁直、威儀を治めず、言いて畏れ避ける無し、虎は甚だ之を重んず。朝之大議は、毎に與に參決し、公卿は皆な憚りて而して之に下る。武城（県、山東省東臨道武城県、現・德州市武城県）の左尉は、虎の寵姫之弟也、嘗て弋仲の營に入り、其の部衆を侵擾す。弋仲は執り而して之を數めて曰く、「爾は禁尉（姦非を禁止する職官）と為り、小民を迫脅す、我は大臣と為り、目親しく見る所、ほしいまま縦にす可からざる也。」

左右に命じて之を斬らしめんとす。尉は叩頭して流血し、左右は固く諫め、乃ち止む。

▲ **〔慕容皝は初めて自らの年号を使用、晉より自立〕** 燕王の皝は以為らく、古者諸侯は即位して、各々元年を稱すと。是に於いて始めて晉の年號を用いず、自ら十二年と稱す。

後趙 **〔石虎と慕容皝の緊張関係〕** 趙王の虎は征東將軍の鄧恆をして兵數萬を將いて樂安に屯し、攻具を治め、燕を取る之計を為さ使む。燕王の皝は慕容霸を以て平狄將軍と為し、徒河に戍せしむ。恆は之を畏れ、敢えて犯さず。

孝宗穆皇帝下永和二年（丙午、346年）

■ **春、正月**、丙寅（1日）、大赦す。

■ **〔何充は卒〕** 己卯（14日）、都郷の文穆侯の何充は卒す。充は器局有り、朝に臨みて色を正し、社稷を以て己が任と為す、選用する所は皆な功效を以てし、親舊に私せず。

▲ **〔前燕は扶余を屈服さす〕** 初め、夫餘（奉天の昌圖洮南以北と蒙古の科爾泌諸旗の地、現・吉林省白城市洮南市、現・内モンゴル自治区科爾泌沙地）は鹿山（不明）に居り、百濟の侵す所と為り、部落は衰え散じ、西に徙りて燕に近づき、而して備えを設けず。燕王の皝は世子の雋を遣わして慕容軍、慕容恪、慕容根の三將軍、萬七千騎を帥いて夫餘を襲わしむ。雋は中に居り指授、軍事は皆な以て恪に任ず。遂に夫餘を抜き、**(6-117p)** 其の王の玄及び部落五萬餘口を虜とし而して還る。皝は玄を以て鎮軍將軍と為し、めあわ妻すに女を以てす。

■ **二月**、癸丑（19日）、左光祿大夫の蔡謨を以て司徒を領し、會稽王の昱と與に同じく政を輔けしむ。

■ **〔褚裒推薦の殷浩は會稽王昱の説得で就職〕** 褚裒は前の光祿大夫の顧和、前の司徒左長史の殷浩を薦す。**三月**、丙子（12日）、和を以て尚書令と為し、浩を建武將軍、揚州刺史と為す。和は母の喪有り、固く辭して起たず、親する所に謂って曰く、

「古人はさいてつ衰經（喪中に着る麻布の衣服）を釋きて王者に従う有り、其の才は時に干するに足るを以ての故也。和の如き者は、正に以て孝道をか虧き、風俗を傷つけるに足る耳。」

識者は之を美とする。浩は亦た固辭す。會稽王の昱は浩に書を與えて曰く、

「このごろ屬厄運に当たり、危弊は理極まり、足下は沈識にして淹長なり、以て經濟（経国済民）するに足る。若し復た深く挹退（謙抑退隱）を存し、苟くも本懷を遂げれば、吾は恐らくは天下之事は此に於いて去らん矣。」

足下の去就は、即ち時之廢興なり、則ち家國は異ならず、足下は宜しく深く之を思うべし。」

浩は乃ち職に就く。

■夏、四月、己酉（16日?、朔は甲午）朔、日食之れ有り。

前涼 **〔前涼の張駿は卒し張重華立つ〕** 五月、丙戌（23日）、西平の忠成公の張駿は薨ず。官屬は世子の重華を上して使持節、大都督、太尉、護羌校尉（涼は代々この称号を使う）、涼州牧、西平公、假涼王と為す。其の境内に赦す（代替わりの恩赦）。尊嫡母の嚴氏を大王太后と為し、母の馬氏を王太后と為す。

後趙 **〔石虎の恐怖政治、蒲洪は諫言〕** 趙の中黃門の嚴生は尚書の朱軌を惡み、會々久しく雨し、生は軌を譖す、

「（軌は）道路を修めず、又た朝政を謗訕（過ちを咎める）す」

趙王の虎は之を囚える。蒲洪は諫めて曰く、

「陛下は既に襄國、鄴宮有り、又た長安、洛陽の宮殿を修めるは、將に以て何に用いるや？獵車千乗を作り、數千里を環らし以て禽獸を養い、人の妻女十萬餘口を奪いて以て後宮を實たし、聖帝明王之為す所、固に是くの若き乎？今又た道路の修まらざるを以て、尚書を殺さんと欲す。陛下の德政は修まらず、天は淫雨を降し、七旬して乃ち霽れる。霽れて方に二日、鬼兵百萬有りと雖も、亦た未だ道路之塗潦（路上の冠水）を去る能わず、而して況んや人を乎！政刑は此くの如くならば、其れ四海を如何せん！其れ後代を如何せん！願はくは作役（続は作徒）を止め、苑囿を罷め、宮女を出し、朱軌を赦し、以て衆望に副うべし。」虎は悦ばずと雖も、亦た之を罪とせず、之が為に長安、洛陽の作役を罷め、而れども竟に朱軌を誅す。又た私に朝政を論ずる（を罰する）之法、吏が其の君を告げ、奴が其の主を告げるを聽す。公卿以下、朝覲するに目を以て相い顧み、必（続は敢）ず復た相い過從して談語せず。

後趙 **前涼** **〔後趙の前涼への侵攻〕** 趙の將軍の王擢は張重華を撃ち、武街（張駿は五屯護軍を置きその一つ）を襲い、護軍の曹權、胡宣を執り、七千餘戸を雍州に徙す。涼州刺史の麻秋、將軍の孫伏都是金城を攻め、太守の張冲は降を請い、涼州は震動す。（6-118p）重華は悉く境内の兵を發して、征南將軍の裴恆をして之を將いて以て趙を御（禦）が使む。恆は廣武（県、甘肅省蘭山道旧蘭州府内、現・蘭州市）に壁し、久しく而して戦わず。涼州司馬の張耽は重華に言つて曰く、

「國之存亡は兵に在り、兵之勝敗は將に在り。今議者は將を擧げるに、多くは宿舊を推す。夫れ韓信之擧げられるは（9卷漢高帝元年にあり）、舊德に非ざる也。蓋し明主之擧げるは、擧げて常人無く、才之堪える所は、則ち授けるに大事を以てす。今強寇は境に在り、諸將は進まず、人情は危ぶみ懼る。主簿の謝艾は、文武を兼ね資し、用いて以て趙を御（禦）ぐ可し。」

重華は艾を召し、問うに方略を以てす。艾は兵七千人を請い、必ず趙を破りて以て報ぜんと願う。重華は艾を拜して中堅將軍とし、歩騎五千を給わり、秋を撃た使む。艾は兵を引いて振武を出でる。夜二梟の牙中（城の本丸）に鳴く有り、艾は曰く、

「六博（博打）の梟（采の一つ）を得る者は勝つと。今梟が牙（本丸）中に鳴くは、敵に克つ之兆也。」

進みて趙と戦い、大いに之を破り、斬首は五千級。重華は艾を封じて福祿（酒泉の県）伯と為す。

麻秋之金城に克つ也、縣令の敦煌の車濟は降らず、劍に伏し而して死す。秋は又大夏（元県で漢は隴西郡に属す。張軌は分けて晉興郡に属し、また分けて大夏郡を置く。甘肅省蘭山道導河県の東南、現・臨夏回族自治州臨夏市）を攻め、護軍の梁式は太守の宋晏を執りて、城を以て秋に應じ、秋は晏を遣わして書を以て宛成都尉の敦煌の宋矩を誘致せしむ。矩は曰く、

「人臣と為り、功は既に成らず、唯だ節に死す有る耳！」

先ず妻子を殺し而して後に自ら^{くびはね} 刎る。秋は曰く、
「皆な義士也。」
収めて而して之を葬す。

【桓温の蜀討伐軍出発】

成漢 **〔蜀の李奔の乱は討伐するも威信は落ちる〕** **冬**、漢の太保の**李奔**は晋壽より舉兵して反し（成都に迫り）、蜀人は多く之に従い、衆は數萬に至る。漢主の**勢**は城に登りて拒み戦い、**奔**は單騎にして門を突き、門者は射て而して之を殺し、其の衆は皆潰ゆ。**勢**は境内に大赦し、改年して嘉寧とす。**勢**は驕淫にして、國事を恤えず、多く禁中に居り、公卿に接するは罕^{まれ}にして、舊臣を疏忌し、左右を信任して、**讒諂**（^{ざんてん} 讒言とひそひそ話し）は並び進み、刑罰は苛濫^{かかん}なり、是に由り中外は離心す。蜀土は先に獠（西南夷の名）無く、是に至りて始めて山從り出で、巴西より犍為、梓潼に至り、山谷に佈滿し十餘萬落、禁制す可からず、大いに民の患いと為る。加えて饑饉を以てし、四境之内は、遂に蕭條（ひっそり）たるに至る。

■ **〔桓温の蜀討伐の決意〕** 安西將軍の**桓温**は將に漢を伐たんとし、將佐は皆な以て不可と為す。江夏相の**袁喬**は之に勸めて曰く、

「夫れ經略は大事にして、固より常情の及ぶ所に非ず、智者は胸中に了し、必ずしも衆言皆な合うを待たざる也。今天下之患いを為す者は、胡、蜀の二寇而して已む。蜀は險固と雖も、胡に比して弱しと為す、將に之を除かんと欲すれば、宜しく先ず其の易き者なり。**李勢**は無道にして、臣民は附かず、且つ其の險遠なるを恃み、戦備を修めず。宜しく精卒萬人を以て軽く繼ぎ疾く趨るべし、其の之を覺る比^{ころ}おい、我は已に其の險要（険しい山地）を出で、一戦して擒とす可き也。（6-119p）蜀地は富饒にして、戸口は繁庶なり、**諸葛武侯**（諸葛亮）は之を用いて中夏に抗衡す、若し得て而して之を有せば、國家之大利也。論者は大軍既に西すれば、胡は必ず窺^{きゆう}せんと恐る、此れ是に似て而して非なり。胡は我が萬里の遠征をするを聞けば、内に重備有りと以て為し、必ず敢えて動かず。縦^{たと}え侵軼^{しんいつ}す有るといへども、緣江の諸軍は以て拒み守るに足らん、必ず憂い無し也。」

温は之に従う。**喬**は、**琨**（袁琨は95 卷成帝咸康三年に見える）之子也。

■ **〔桓温出発〕** **十一月**、辛未（11 日）、**温**は益州刺史の**周撫**、南郡太守の**譙王**の**無忌**を帥いて漢を伐ち、拜表して即ち行く。安西長史の**范汪**に委ねるに留事を以てし、撫督梁州之四郡（涪陵・巴東・巴西・巴郡）の諸軍事を加える。**袁喬**をして二千人を帥いて前鋒と為さしむ。

■ **〔勝利後の朝廷専制を恐れる〕** 朝廷は蜀道は險遠にして、**温**の衆は少なく而して深く入るを以て、皆な以て憂と為す、惟だ**劉惔**は以て必ず克つと為す。或は其の故を問い、**惔**は曰く、

「博を以て之を知る。**温**は、善く博する者也、必ず得るに非ざれば則ち為さず。但だ蜀に克つ之後なり、**温**は終に朝廷に専制するを恐る耳。」

孝宗穆皇帝下永和三年（丁未、347年）

■ **春、二月**、**桓温**の軍は青衣（県、四川省建昌道雅安県の北、現・雅安市雨城区）に至る。漢主の**勢**は大いに兵を發し、叔父の右衛將軍の**福**、從兄の鎮南將軍の**權**、前將軍の**咎堅**等を遣わして之を將い、山陽（岷江の北、峨眉山の陽）より合水（青衣水と沫水が江水に注ぐ口、四川省永寧道宜賓県、現・宜賓市叙州区）に趣かしむ。諸將は江南に於いて伏を設け以て晋を待たんと欲し、**咎堅**は従わず、兵を引いて江北の鴛鴦碛より渡りて犍為に向か

う。

■ 〔桓温は全軍で成都をめざす〕 三月，温は彭模（四川省建昌道彭山县、現・眉山市彭山区）に至る。議者は分けて兩軍と為し，道を異にして俱に進み，以て漢兵之勢いを分けんと欲す。袁喬は曰く、

「今懸軍は深く萬里之外に入る，勝てば則ち大功は立つ可し，勝たざれば則ち噍類（生き残り）遺る無し，當に勢いを合して力を齊しくし，以て一戰之捷ちを取るべし。若し兩軍に分ければ，則ち衆心は一ならず，萬一にも偏敗（片方が敗れる）すれば，大事は去らん矣。全軍而して進むに如かず，釜甑を棄て去り，三日糧を繼ぎ，以て還る心無きを示せば，勝つは必ず可き也。」

温は之に従い，參軍の孫盛、周楚を留めて羸兵を將いて輜重を守らしめ，温は自ら歩卒を將いて直ちに成都を指す。楚は，撫之子也。

■ 〔桓温は成都に迫り咎堅は自壊す〕 李福は進みて彭模を攻め，孫盛等は奮撃し，之を走らす。温は進み，李權に遇い，三戰して三捷し，漢兵は散走して成都に歸り，鎮東將軍の李位都是迎えて温に詣りて降る。咎堅は犍為に至り，乃ち温と道を異なるを知り，還り，沙頭津より濟り，至る比おい，温は已に成都之十里陌に軍し，堅の衆は自ら潰ゆ。

■ 〔成漢李勢の降伏と滅亡〕 勢は衆を悉くして出でて成都之笮橋（萬里橋の西の上流）に戦い，温の前鋒は利あらず，參軍の龔護は戦死し，矢は温の馬首に及ぶ。衆は懼れ，退かんと欲す，而るに鼓吏は誤まりて進鼓を鳴らす。袁喬は劍を抜き士卒を督して力戦し，遂に大いに之を破る。温は勝ちに乗りて長驅して成都に至り，火を縦ちて其の城門を焼く。漢人は惶懼し，復た鬥志無し。勢は夜東門を開いて走り，葭萌に至り，（6-120p）散騎常侍の王幼をして降文を温に送らせしめ，自ら稱す、

「略陽の李勢は叩頭死罪、

尋いで櫬を輿ひつぎににないて面縛して軍門に詣る。温は縛を解いて櫬を焚き，勢及び宗室十餘人を建康に送る。漢の司空の譙獻之等を引いて以て參佐と為し，賢を擧げ善を旌あわし，蜀人は之を悦ぶ。

■ 〔日南太守夏侯覽は林邑王文に殺される〕 日南太守の夏侯覽は貪縦にして，胡商（外国商人）を侵刻し，又た船材を科調し，雲いて、

「討つ所有らんと欲す」

是に由り諸國は悲憤す。林邑王の文は攻めて日南を陥とし，將士の死者は五六千，覽を殺し，屍を以て天を祭る。交州刺史の朱蕃に檄して，郡北の横山（日南郡の北界の山、安南ベトナムの地）を以て界と為さんと請う。文は既に去り，蕃は督護の劉雄をして日南に戍せしむ。

■ 〔桓温は蜀混乱平定し江陵帰還〕 漢の故の尚書僕射の王誓、鎮東將軍の鄧定、平南將軍の王潤、將軍の隗文等は皆な兵を擧げて反し，衆は各々萬餘なり。桓温は自ら定を撃ち，袁喬をして文を撃たせしめ，皆な之を破る。温は益州刺史の周撫に命じて彭模に鎮ぜしめ，王誓、王潤を斬る。温は成都に留まること三十日，振旅して江陵に還る。李勢は建康に至り，歸義侯に封じる。夏，四月，丁巳（29日），鄧定、隗文等は入りて成都に據り，征虜將軍の楊謙は涪城を棄て，退きて德陽を保つ。

【後趙は河南奪取し前涼に迫る】

後趙 前涼 〔麻秋は前涼の枹罕を攻め切れず〕 趙の涼州刺史の麻秋は枹罕（現・臨夏回族自治州臨夏市）を攻め

る。晉昌（甘肅省安肅道道安西県、現・酒泉市瓜州県）太守の郎坦は城の大にして守り難きを以て、外城を棄てんと欲す。武成（張氏の置く郡）太守の張俊は曰く、

「外城を棄てれば則ち衆心は動き、大事は去らん矣。」

寧戎校尉（張氏の置く官）の張璩は俊の言に従い、固く大城を守る。秋は衆八萬を帥い、圍む塹は數重、雲梯（攻城用大型梯子）地突（地下道で城中に突出する）、百道より皆な進む。城中は之を御ぎ、秋の衆は死傷すること數萬。趙王の虎は復た其の將の劉渾等を遣わして歩騎二萬を帥いて之に會さしむ。郎坦は言の用いられざるを恨み、軍士の李嘉に教（続には欠）えて潜かに趙兵千餘人を引きて城に登らしむ。璩は諸將を督して力戦し、二百餘人を殺し、趙兵は乃ち退く。璩は其の攻具を焼き、秋は退きて大夏を保つ。

後趙 前涼〔謝艾は麻秋を破る〕虎は中書監の石寧を以て征西將軍と為し、并、司州の兵二萬餘人を帥いて秋等の後繼と為さしむ。張重華の將の宋秦等は戸二萬を帥いて趙に降る。重華は謝艾を以て使持節、軍師將軍と為し、歩騎三萬を帥いて進みて臨河に軍せしむ。艾は輜車（小車）に乗り、白〔巾〕（白かしら鼓）を戴き、鳴鼓を鳴らして而して行く。秋は望見し、怒りて曰く、

「艾は年少の書生なり、冠服は此くの如し、我を輕んじる也。」

黑契龍驤三千人に命じて馳せて之を撃たしめ、艾の左右は大いに擾れる。或は艾に、
「宜しく馬に乗るべし」

と勸めるも、艾は従わず、下車して、胡床に踞し、指麾處分す。趙人は以て伏兵有りと為し、懼れて敢えて進まず。別將の張瑁は間道より兵を引いて趙軍の後を截ち、趙軍は退き、艾は勢いに乗りて進撃して、大いに之を破り、其の將の杜勳、汲魚を斬り、（6-121p）首虜一萬三千級を獲り、秋は單馬にして大夏（現・臨夏回族自治州臨夏市）に奔る。

後趙 前涼〔後趙はひしひしと前涼に迫る〕五月、秋は石寧と復た衆十二萬を帥いて進みて河南に屯し、劉寧、王擢は晉興（張軌は西平郡界を分けて晉興郡を置く、甘肅省蘭山道旧蘭州府内）、廣武、武街を略地し、曲柳（洪池嶺の北、甘肅省甘涼道旧涼州府内、現・武威市近辺）に至る。張重華は將軍の牛旋をして之を御が使め、退きて枹罕を守り、姑臧は大いに震える。重華は親ら出でて之を拒まんと欲し、謝艾は固く諫める。別駕從事の索遐は曰く、

「君者、一國之鎮なり、輕々しく動く可からず。」

乃ち艾を以て使持節、都督征討諸軍事と為し、衛將軍を行わしめ、遐を軍正將軍と為し、歩騎二萬を帥いて之を拒ましむ。別將の楊康は劉寧を沙阜（甘肅省甘涼道旧涼州府内、現・武威市近辺）に敗り、寧は退きて金城に屯す。

■六月、辛酉（元嘉曆七月5日）、大赦す。

■秋、七月、林邑は復た日南を陷とし、督護の劉雄を殺す。

■〔蜀の範賁の内乱〕隗文、鄧定等は故の國師（李雄が任命）の範長生之子の賁を立てて帝と為し而して之を奉じ、妖異を以て衆を惑わし、蜀人は多く之に歸す。

後趙 前涼〔謝艾は麻秋の軍を撃破〕趙王の虎は復た征西將軍の孫伏都、將軍の劉渾を遣わして歩騎二萬を帥いて麻秋の軍に會せしめ、長驅して河を濟り、張重華を撃ち、遂に長最（金城河の北、甘肅州西寧道平番県、現・蘭州市永登県）に城きづく。謝艾は牙を建て衆に誓い、風有り旌旗を吹き東南を指す、索遐は曰く、

「風は號令と為し、今旌旗は敵を指す、天の贊ける所也。」

艾は神鳥に軍し、王擢は艾の前鋒と戦い、敗走し、河南に還る。八月、戊午（元嘉曆九月3日）、艾は進みて秋を撃ち、大いに之を破り、秋は遁げて金城に歸る。虎は之を聞き、歎じて曰く、

「吾は偏師を以て九州を定め、今九州之力を以て枹罕に困しむ。彼に人有る焉、未だ圖る可からず也！」
艾は還り、叛虜の**斯骨真**等萬餘落を討ちて、皆な破りて之を平らぐ。

後趙 **〔石虎は前代の墓を暴いて財宝を取る〕** 趙王の**虎**は十州之地に據り、金帛^{しゅれん}を聚斂し、及び外國の獻ずる所の珍異、府庫の財物は、勝^あげて紀す可からず。猶ほ自ら以て足らずと為し、悉く前代の陵墓^{あば}を發き、其の金寶を取る。

後趙 **〔石虎の大土木工事に怨嗟の声〕** 沙門の**吳進**は**虎**に言つて曰く、

「胡の運は將に衰えんとし、晉は當に復た興るべし、宜しく晉人を苦役して以て其の氣を厭^{おき}（厭伏）えるべし。」

虎は尚書の**張群**をして近郡の男女十六萬人、車十萬乘を發し、土を運びて華林苑及び長牆を鄴北に築か使め、廣袤^{こうほう}（広がり）は數十里なり。**申鐘**、**石璞**、**趙攬**等は上疏して天文は錯亂し、百姓は凋弊するを陳ず。**虎**は大いに怒りて曰く、

「苑牆をして朝に成ら使めば、吾は夕べには没するとも恨むる無し矣。」

張群に促して燭^もを然やして夜作ら使む。暴風大雨あり、死者は數萬人なり。郡國は前後蒼麟十六、白鹿七を送る、**虎**は司虞（山澤を司る官）の**張曷柱**に命じて之を調して以て芝蓋（瑞芝の形をした蓋）に駕せしめ、大いに朝會にて殿庭に列せしむ。

後趙 **〔石虎は天崩地陷以外は恐れず〕** **九月**、太子の**宣**に命じて出でて福を山川に祈り、因りて行きて遊獵せしむ。**宣**は大輅（天子が乗るための車）に乗り、羽葆（羽根飾り）華蓋、**天子**の旌旗を建て、十有六軍と戎卒十八萬は、金門門（鄴の西門）より出る。**虎**は其の後宮を從え陵霄觀に升りて之を望み、**(6-122p)** 笑いて曰く、

「我が家の父子は是くの如し、天崩れ地陷つに非ざるよりは、當に復た何をか愁えるや！但だ子を抱き孫^{もてあそ}を弄^もび、日々に楽しみを為す耳。」

後趙 **〔太子宣の狩獵の後に残余無し〕** **宣**が舍する所は、輒ち人を列して長圍を為し、四面は各々百里、禽獸を驅り、暮に至りて皆な其の所に集まらしめ、文武をして皆な跪立し、重行（幾重にも）して圍守せ使め、炬火は晝の如く、勁騎百餘に命じて馳せて其の中を射しめ、**宣**は姬妾と與に輦に乗りて臨み觀て、獸盡きて而して止む。或は獸^{ほういつ}の迸逸有るときは、當に圍守する者は、爵有れば則ち馬を奪い、步驅して一日ならしめ、爵無ければ則ち之を鞭うつこと一百。士卒の饑え凍死する者は萬有餘人、過ぎる所の三州（司州兗州豫州）十五郡は、資儲は皆な子遺^{けつゐ}（残余）無し。

後趙 **〔石宣と石韜の確執の始まり〕** **虎**は覆た秦公の**韜**に命じて繼いで、并州より出で秦、雍に至る、亦た之の如し。**宣**は其の己と鈞敵するを怒り、愈々之を嫉む。宦者の**趙生**は**宣**の幸を得、**韜**に寵無^{ひそか}く、微に**宣**に之を除くを勸め、是に於いて始めて**韜**を殺す之謀有り矣。

後趙 **前涼** **〔麻秋の再出兵で河の南を制す〕** 趙の**麻秋**は又た**張重華**の將の**張瑁**を襲い、之を敗り、斬首は三千餘級。枹罕護軍の**李遼**は衆七千を帥いて趙に降り、河より以南の氐、羌は皆な趙に附く。（趙は強く涼は弱し。屢々勝つと雖も、人心は強弱に従つて向背を為す、まして張瑁が負ければ尚更）

■**前涼** **〔張重華は東晉の爵命に躊躇〕** **冬**、**十月**、乙丑（11日）、侍御史の**俞歸**を遣わして涼州に至らしめ、**張重華**に侍中、大都督、督隴右、關中諸軍事、大將軍、涼州刺史、西平公を授ける。**歸**は姑臧に至り、**重華**は涼王を稱さんと欲し、未だ詔を受けるを肯ぜず、親する所の**沈猛**をして私に**歸**に謂つて曰わ使む、
「主公^{えきせい}は弈世（累世）晉の忠臣^た為り、今會^{すなわ}ち鮮卑に如かずは、何ぞ也？朝廷は**慕容皝**を封じて燕王と為す、而るに主公は才^{わづ}かに大將軍^た為り、何を以て忠賢を褒勸せんや乎！明台（俞歸は侍御史だから）は宜しく河右に

移（回文）し、共に州主に勧めて涼王と為さん。人臣は出でて使いするに、苟くも社稷に利あれば、之を専らにするも可也。」

歸は曰く、

「吾子（列国の大夫はお互いに呼び合う呼称）言を失えり！昔三代之王たる也、爵之貴き者は上公に若くは莫し。周之衰えるに及び、吳、楚は始めて僭號して王を稱す、而るに諸侯は亦た之を非とせず、蓋し蠻夷を以て之を畜^{やしな}う也。借りに齊、魯をして王を稱せ使めば、諸侯は豈に四面より之を攻めざる乎！漢の高祖は韓（韓信）、彭（彭越）を封じて王と為し、尋いで皆な誅滅す、蓋し權時之宜しきにして、之を厚くするに非ざる也。聖上は貴公の忠賢を以て、故に爵するに上公を以てし、任ずるに方伯を以てし、寵榮は極まれる矣、豈に鮮卑夷狄の比す可き所哉！且つ吾は之を聞く、功に大小有り、賞に重輕有り。今貴公は始めて世を繼ぎて而して王と為る、若し河右之衆を帥いて、東に胡、羯を平らげ、陵廟を修復し、天子を迎えて洛陽に返し、將に何を以てか之を加えん乎？」（張重華は繼承直後でまだ東晋にとっての功績が無いと言う）

重華は乃ち止む。

■武都の氐王の楊初は遣使して來たりて稱藩す。詔して初を以て使持節、征南將軍、雍州刺史、(6-122p) 仇池公と為す。

■十二月，振威護軍の蕭敬文は征虜將軍の楊謙を殺し，涪城を攻め，之を陷とし，自ら益州牧と稱し，遂に巴西を取り，漢中に通じる。

令和3年3月13日	和訳開始	11955文字
令和3年3月26日	和訳終了	23985文字
令和3年12月2日	書下し終了	24308文字